

はじめに

一九八九年七月より約四年、運輸会社の駐在員としてモスクワに勤務し、そこで生活するうち、とあるきっかけから絵を鑑賞したり蒐集したりすることが、新たな趣味として私の中で大きな場所を占めることになった。

モスクワに駐在したその時期は、ソ連が崩壊するという歴史上の激動期であった。一般のロシア人の生活は制度や規則の激変により大きな影響を受け、食料品を中心に店頭からは商品が姿を消すような事態もかなりの期間続いて、九一年八月のソ連政府要人によるクーデター未遂の時は、当時ソ連の一共和国であったロシアの最高会議(そこに当時のエリツィン・ロシア共和国大統領が立てこもった)、いわゆるベールイドーム(ホワイトハウスの意)の手前のモスクワ川に架かる橋には、バスやトラックのバリケードが築かれたりした。しかし、社会の根底をひっくり返すような激動の割には、一時心配された市街戦や騒乱といった事態になることもなく、総じてモスクワの街は平静を保っていたというのが、私の全駐在期間を通じての実感であった。

本書のテーマである現代ロシア写実主義絵画について言えば、絵はいつも画廊に豊富に出回っていて、外国人の私にとってはまだ手の届く身近な存在であった。その中には芸術価値の高い作品も多少は混じっていて、良い絵を見分ける慧眼さえあれば、そうした作品を集めることも出来たのである。

私自身はモスクワに駐在するまでは、特にこれとって絵に興味があったわけではなかったが、モスクワで絵が好きになって、頻繁に絵を鑑賞するようになってみると、嬉しい発見として、絵を解する感受性が多少は私に備わっていたらしいことが判り、物事に熱中しやすい質であることも手伝って、現代ロシア絵画にのめり込むように魅せられていったのである。その結果として、二百点を超える作品を蒐集することになったが、それらの絵は私ばかりでなく、ロシア人の二人の画家の友達や国外持ち出し許可のため帰任時に実際に絵をチェックした二人のロシア文化省絵画鑑定専門家たちからも、総じて高い評価を得ていたことから見て、それなりの現代ロシア絵画の水準を示すコレクションではないかと自負している。

コレクションの多くは、純粹な自然の風景画ないしは自然の中で営まれるロシア人の生活を描いた風景画である。私がそうした風景画ばかりを特に意図して選んだというわけではなく、それは画廊に展示されていた絵の七割近くがそのような風景画であったためであり、その中に私の気に入った絵も混じっていたということを意味している。

どういうわけで自然の風景画がそんなにも多いのかと、不思議に思い、その理由をいろいろ考えて思い当たったことは、ロシア人の生活に自然が大変密接にかかわっているということであった。モスクワも少し郊外に出ると、広大な白樺の林や遠景に針葉樹の森林を擁した見晴らしのきく耕地や草原が広がり、そうした自然に接すると自ずとストレスが解消して、大自然に心が洗われたような気持になる。

ロシア人は家父・母を含めた大家族の単位で考えれば、都市部に住む一般庶民の多くが、そんな郊外にささやかながらもダーチャ(別荘)を持ち、四月頃から十月初めぐらいまでは週末を、また、夏は一、二か月も休暇を取って、畑仕事をしたり、日光浴をしながら

本を読んだり、森を散策したりして、ゆったりと過ごす習慣がある。そのためか、いつまでも心の余裕や人懐こい素朴さを失わない人も多く、歴史上の激動期にあって、生活苦が彼らに重くのしかかっていたのは事実であるが、先行きの不安についてはそれほどよくよもせず、ユーモアやアネクドート(ブレジネフ時代のソ連で盛んになった政治風刺小話)の世界に笑いを求め、今日をしたたかに、たくましく生きているという印象を受けたものである。日本人の私には、そんな彼らの生き方に教えられるところも多々あったのであるが、画家も同じ生活習慣の中で暮らし、ロシア人の生活に深いかわりを持つ大自然の素晴らしさを絵に表現しているのであろう。

駐在を終えてそれらの絵を日本に持ち帰り、自宅の部屋の壁にかけて眺めてみると、光の絶対量が格段に多い日本の地で絵は一段と映えて見え、現代ロシア絵画の芸術レベルの高さに改めて感心させられることになったが、それから五年近く経った現在も絵を見飽きるということは少しもなく、私にとって仕事の憂さを癒してくれる、かけがえのない存在となっている。

ところが、日本に戻って初め意外に思えたことであるが、ロシア絵画は日本ではほとんど相手にされていないと言ってもよいほどのものであった。美術館でロシア絵画を所蔵している所はほんのわずかな例外を除いてまずなく、また、書店でもヨーロッパの画家のアルバムには事欠かない中で、ロシアの写実主義絵画の載った新刊アルバムを探し当てることは不可能であった。西洋美術史を繙(ひもと)いても、私には間違いなく世界の最高レベルのひとつであったと思われる十九世紀後半のロシア・リアリズム絵画でさえ、全く言及されていない本もあるくらいで、少しでも触れられている本があれば、もうそれでよしとすべきところなのであるが、そういった多少ともましな本を見つけて、「おお、載っていたか」と喜び勇んで読んでみると、I・Ye・レーピンやV・I・スーリコフの名前がわずかに出てくるくらいが精々といった簡単な記述に、かえって寂しい思いがしたりした。その状況はヨーロッパやアメリカでも大差ないということのようであるが、それはロシア絵画の芸術価値が低いためというのではさらさらなく、単になじみが薄いために評価の対象にさえなっていない状況であり、また、それに疑問を投げかけるほどにはロシア絵画の研究も欧米や日本において進んでいないというのが、その理由と想われる。

しかし、日本でも一九七〇年代には現代ロシア絵画が盛んに紹介され、好評を博していたので、覚えておられる方もあるだろうが、ロシア絵画は私たち日本人にとって決して縁遠い感じの絵ではなく、むしろその逆に親しみが持て、身近に感じられる類の絵なのである。

私は日本の画家では東山魁夷の絵が大ファンと言えるほどに好きである。一九九七年七月に東京のデパートで催された彼の米寿記念の特別展で、まとまった数の実物の作品に初めて接して、大変大きな感銘を受けたのであるが、同時にその作品の持つ雰囲気がロシア絵画と似ていると感じ取って、驚きを禁じ得なかったのである。勿論、一方が日本画で他方が洋画であり、画風が似ているなどと言ってひんしゅくを買うつもりはない。その点は一步譲るとしても、表現以前の問題として画家が自然から感じ取っているものに共通

点があるように思われたのである。

彼の作品には、自然の中にえも言われぬ静けさの漂うといった絵が多く、その静寂からは滝の響きや風の音等の自然の奏でる音が聞こえてくるような気配が感じられる。そこに表現されているものは、自然の美しさというよりも、それをも包含した何か底知れぬ神秘的な感情や畏敬の念を呼び覚ますような大自然の佇まいであり、それらの織り混ざった情感がひしひしと身に迫るように伝わってくる。

ロシア絵画の作品にも深い色合いの自然描写の表現の中に、それと似た感情が込められているのを感じることもある。日本人の深層心理には自然を神格化した原始宗教の名残があるとされているが、ロシアも十世紀にキリスト教化されるまでは太陽や自然現象の中に神を見る多神教であったわけで、民話等にその名残が受け継がれている。東山魁夷の特別展を見た時に、ひょっとしたら日本人もロシア人も自然に対する感情に似たような下地があるのかもしれないという思いにふと駆られたのである。

それはさておき、私のようにロシア絵画の自然描写に深い感銘を受ける日本人も少なくないと思えるのであるが、それだけに現代ロシア絵画はおろか、十九世紀後半の近代ロシア絵画さえ注目されていない今の日本の状況が、不思議でもあり、また、残念でならない。

実は、三年、四年と経過して、そんな状況に少しも変化が現れなかったことが、現代ロシア絵画についての本書を書く動機になったのであるが、日本に戻って、ロシア絵画に対するなじみのなさを目の当たりにするうち、物足りなさや寂しさや口惜しさといった気持が段々と募ってきて、ロシア絵画の良さをもっと日本で知ってもらおうことの必要性を度々痛感するようになった。

どのようなものであれ、真価を知って心から敬愛の念を抱く者にとって、その対象が周囲の関心を全く惹かないような現状を見るのは辛いものである。私のロシア絵画に対する思いは、ちょうどそのようなものであったが、そうは言え、関心を惹かない理由が実際には、その真価を知る機会がほとんどないためであり、そのため、時が経てば経つほどじわじわと、この状況をなんとかできないものだろうかといった気持が大きくなっていったわけである。

私のコレクションが超一流と言えるようなものではないかもしれないが、それでもその中には現代ロシア絵画の美しさを伝えられる作品があり、その絵画に魅せられ、それなりの点数の実物の作品を所有する私自身が、せめてその絵画の素晴らしさをアピールし、おしなべてロシア絵画が日の目を見ない日本の状況に一石を投じるようなことをしなかったなら、ほかの誰にそうした役割を期待するのであろうかといった自問を繰り返すうち、少しは私もロシア絵画の普及に役に立つようなことをしたいと思うようになったのである。

はじめは画廊等のスペースを借りて、コレクションを見せることを空想したりしていたが、何かの事業の一環としてするのでなかったらその効果も薄く、長続きしないことは目に見えているので、取りあえず諦めることにして、結局消去法で最後に現代ロシア絵画についての本を書くという考えが残った。しかし、あれこれと考え、いざ書こうという段になってみると、そう簡単でもなく、差し当たり私に出来そうなことと言えば、実際私が魅せられた現代ロシア絵画の作品を紙上でお見せして、それによりロシア絵画の美しさを読者の方々にお届けすることぐらいであり、その制約の中で何が出来るか心許ないが、書い

てみないことには始まらないので、とにかく書いてみようということになったのである。

本書は絵が解らないと思っている人やロシア絵画になじみがない人にも入りやすいようにという考えと、また、ロシア絵画の理解がより深まるような書き方をするにはどうすればよいかといった見地から、実際絵にそれほど関心のなかった私が現代ロシア絵画に魅せられていった経緯を初めに述べることにし、その上でその絵画作品を私のコレクションの中から紹介するという構成にした。

そうした話の展開のために、いきおい、「わたしの絵画蒐集物語」といった側面が強調されたものになるであろうが、むしろそうした物語の一貫性を尊重し、その話の展開の中で作品をご覧頂くという趣向である。

言わずもがなのことであるが、作品は現代ロシア絵画がどのようなものであるかを知ってもらうために、あくまでひとつの例として紹介するもので、主体は、紹介例を通じてその絵画の芸術的特徴を把握し、その本質を開示することにある。

作品の紹介は四章からなり、目的別に四つの異なった側面からそれぞれに相応しい作品を選び、またその間に十九世紀後半のロシア美術史を挟んで、総じて現代ロシア絵画がどのようなものであるかといったことが、出来るだけ明らかになるように書き進めたいと考えている。ただし、抽象絵画は、画廊でほんの稀にしか目にしなかったという理由で対象から外してあり、また、テーマ対象の写実主義絵画についても、その画風は多様であり、いろいろな流派があるようであるが、本書はそのような現代ロシア絵画全般の傾向を網羅的に紹介するというものではなく、現代のロシア画壇で主流派を占めている伝統的なリアリズム絵画の作品に的を絞るつもりであることをここで予めお断りしておきたい。その理由は、ロシアで世界にすぐにも通用する芸術レベルの現代絵画と言え、何と言っても伝統的なリアリズム絵画であり、その絵画芸術の素晴らしさを少しでも伝えることに、本書の主眼があるからである。

このささやかな拙著がロシア絵画理解の一助になれば、それに優る幸せはない。